



小瀬アイスアリーナで行っているチーム練習。この日は「ライン(方向性)」の精度を高めるトレーニングを実施。カーリングをはじめてまもない最年少の依田選手がカー杯ストーンを放つ

「歩いた記憶はありません」 下半身麻痺のやんちゃ坊主

南アルプス市生まれ、南アルプス市在住の宮川正文。生後8ヶ月のときに「小児麻痺」にかかり、後遺症で下半身が不自由になった。

「歩行器に入っている写真を見たことはありませんが、自分の足で歩いた写真や記憶はありませんね」

物心がつくより前から車椅子で生活する。身体障がい者。幼稚園、小学校、中学校までを韮崎市の「あけぼの医療福祉センター」で過ごした。

「子ども時代はとにかくやんちゃでした。もともと足が悪いくせに、高いところから飛び降りて骨折したり、車椅子で坂を猛スピードで走り、転倒して骨折したり。あちこち骨を折ってばかりいました」

勉強は好きではないが、身体を動かすことが大好き。ハンディをものともせず、外に出て、できる運動を探す。近所の幼馴染と一緒に野球などをして遊び、親が心配するほど遠くまで出かけてしまうこともあったという。

「まわりの子と比べて、何がどう」とか、卑屈になることは一度もありませんでした。親の影響も強いと思います。実家は寿司屋を営んでいて、いつも忙しかった。ほしいものがあれば自分で買いに行かなければいけないし、家族は自分を特別扱いする暇がない。お店でお客さんにちよっかいを出してひどく怒られたこともありました。ですから、自分で外に出て、楽しみを見つけるしかない。楽しいことを探すのは自然なことでした」

「ここなら暴れられる」 車椅子バスケットの出会い

中学3年のとき、障がい者施設の先生から「宮川は社会に出た方がいい」と言われ、普通高校を受験。巨摩高校に進学し初めて健常者と同じ教室で学生時代を過ごすようになった。部活は小学校から続けている卓球部に所属。腕前は「ふつうでしたよ」と少し窮屈そうに振り返る。

宮川の世界を大きく広げたのが、車椅子バスケットの出会い。当時すでに東京などではさかんになっていた車椅子バスケットだが、山梨にチームはなかった。そこへ「車椅子バスケットのクラブチームを作るから、手伝ってほしい」と宮川に声がかかった。

「チームの中で自分が最年少。自分以外は社会人で40歳前後の人もいました。それまでも運動が好きで身体を動かしてはいましたが、車椅子バスケットは次元が違った。運動量の多さや激しい衝突が競技の中にあることはもちろん、試合をするために東京に遠征するなど、初めてのことばかり。世界が突然ひらけました」

誘われた当初は、まだバスケットボールを思う方向にきちんと投げられない。筋力も体力もなかったという宮川だが、「ここなら思いっきり暴れられる」と気を吐き、トレーニングを始めるの目を見張る速度で上達していったという。

高校卒業後は現・南アルプス市役所へ就職。チームに所属し車椅子バスケットは続いていたのだが、公務に追われて思うように練習をできない時期もあった。25歳のときには、地元山梨で「かいじ国体」が開催され、車椅子バスケットも行われたのだが、宮川自身は